

今回の大震災は再生日本の先触れとなるか

アメリカでもっとも有名な政治ニュースマガジンをご存知ですか。

「完全無欠であるはずの原子力産業が過去、現在、未来とどのように狂奔してきたか、福島原発の炉心溶解が起きているのにオバマは再なる核エネルギー開発の推進を宣伝し、日本の核エネルギー政策を支持、私達はこれまでの70年間はもとよりこれからもプルトニウムを喰い続けていくのでしょうか。どうしてフランスではサルコジが嫌われるのか。」

こういった核エネルギー政策への論考を政治ニュースマガジン「counter punch」を載せた日本在住の哲学者柄谷行人（カラタニコウジン）の“*How Catastrophe Heralds a New Japan*、今回の大震災は再生日本の先触れとなるか”を私なりに拙い英語力で訳してみました。皆さんいかがお感じになるでしょうか。

主旨は“今回の大震災によってもたらされるものは、日本の死ではなく再生の始まりである。”
今も東京は余震で揺れています。1995年の阪神淡路大震災（以下、神戸）では6,000人以上の命を失いました。震災当日そこに居なくても刻々と伝えられる震災の惨状、今回の東日本大震災は神戸のそれを遥かに上まわるものでした。数100kmにわたる大震災と大津波、福島核破壊は、数少ない人を除いて予想不可能であった神戸とは異なり、偶発的なものではなかったのです。東北地方の地震と津波は歴史的にも十分に予想され、そこでの原子力開発については常に強い危惧と警告がされつつも、誰もそのことを信じようとしなかったのです。

神戸の震災は1980年代にはじまる日本経済の下降のシンボルであったはずなのに、ネオ・リベラリズムという自由経済政策のもと経済回復の口実として、もう一度“Japan as No.1”を取り戻す契機と捉えられたのです。経済の衰退、人口減少、高齢社会と云ったバラ色の展望の見えない中でも、日本経済は更なる発展をとげるという空虚な愛国主義者の主張がメディアの中で踊らされた反面、低成長社会、新しい経済動向、市民社会形成の重要性が叫ばれてもいました。

神戸大震災の夜、なににもまして印象に残っているのは家を失った高齢者の落ち着きであり、第2次大戦後の破壊的打撃から出発した状況そのものでした。加えて各地から駆けつけた若いボランティア達の活躍は、中国四川地震でみられたように日本にとって珍しいことではなかったのです。

“A Paradise Built in Hell, 地獄から天国への道”で1905年のサンフランシスコ地震とその後のパニックにおいて、秩序が乱れるとお互いにうねるような予想もできないコミュニケーションが生まれたり、恐怖のもとでのカオスから国家とは別の形での相互扶助を目的とした社会が形成されたりすると述べられています。神戸大震災の結果生まれた新しいコミュニティは日本固有の歴史的背景と戦後の近代日本を映し出す心理的背景を強く意識しています。しかしながら震災の夜の“Paradise”への思いは戦争の記憶とともにつかの間に消えてしまいました。

神戸大震災後の秩序回復を景気回復の好機と捉えようとした小泉首相のネオ・リベラリズム政策

は、自己防衛にもとづくすばやいイラクへの派遣により平和路線を踏み躪り、経済の停滞と格差社会を増長、自民党から民主党政権へと代わり映えない政治となりました。

今回の大震災は戦後日本の破滅的破壊をもう一度呼び起こすものであり、原発事故は救いようのない広島、長崎の惨事を思い出させました。戦後日本は核兵器はもとより核エネルギー開発にも強い嫌悪感を抱き続けてきました。こうした強い核エネルギーへの反応は 1970 年代に始まったオイルショックによって脆くも崩れ去り、企業や政府の炭酸ガス排出削減を口実に核エネルギー開発推進へとすり替えられてしまいました。西欧に互して生き抜くためには敗北から学んだ平和への夢を捨て、強大な兵力と経済力の回復を求めてきました。

この野望を打ち砕いたのが今回の大震災であったはずですが。これらのことは日本だけの問題ではなく、1970 年代初期に始まる世界的な資本主義の深刻な後退により、これまでのように利益を貪ることができなくなって、BRICS をはじめとする第 3 世界に財務産業投資をすることによって救いを求めてきましたが、いずれその償いと消費の停滞が必ずくることでしょう。

資本主義経済の終焉は人類の終わりではなく、資源と市場による資本主義経済を超えた強大な力を日本は選択すべきと信じます。今回の大震災がなかったとしたら、日本は途方もない力によって空虚な奈落へ陥ったであろうし、今や甘い夢は捨て去るべきです。

今回の大震災によってもたらされたものは日本沈没ではなく、再生への先触れであり、むしろ勇気を与えてくれるものと捉えたい。

以上が counter punch に於ける柄谷行人の論考です。今も尚、東北関東は余震による被害に脅え、電気、水道、ガス、道路のストップはもとより生活物資の補給と生活空間の確保に難渋しています。原発事故の見通しが立っていない中、これ程までに三陸海岸に沿って原発をはじめ発電所が存在していたことにあらためて驚かされ、ことの深刻さに打たれます。

今回の大震災に際し先の皆様方の義援金はすでに送らせていただきましたが、引き続いて募金活動を患者様と一緒に続けるよう計画しています。私共医療法人財団はまゆう会としても、今回の大震災に対し平成 22 年度決算利益の約 1%，職員一人当たり一万円程度の義援金を日本赤十字社を通じて送ることにしました。私達にできることを気長に支援していきましょう。

平成 23 年 4 月 12 日

理事長 市丸 喜一郎